中　道　遺　跡

―第1次発掘調査概報―

1995

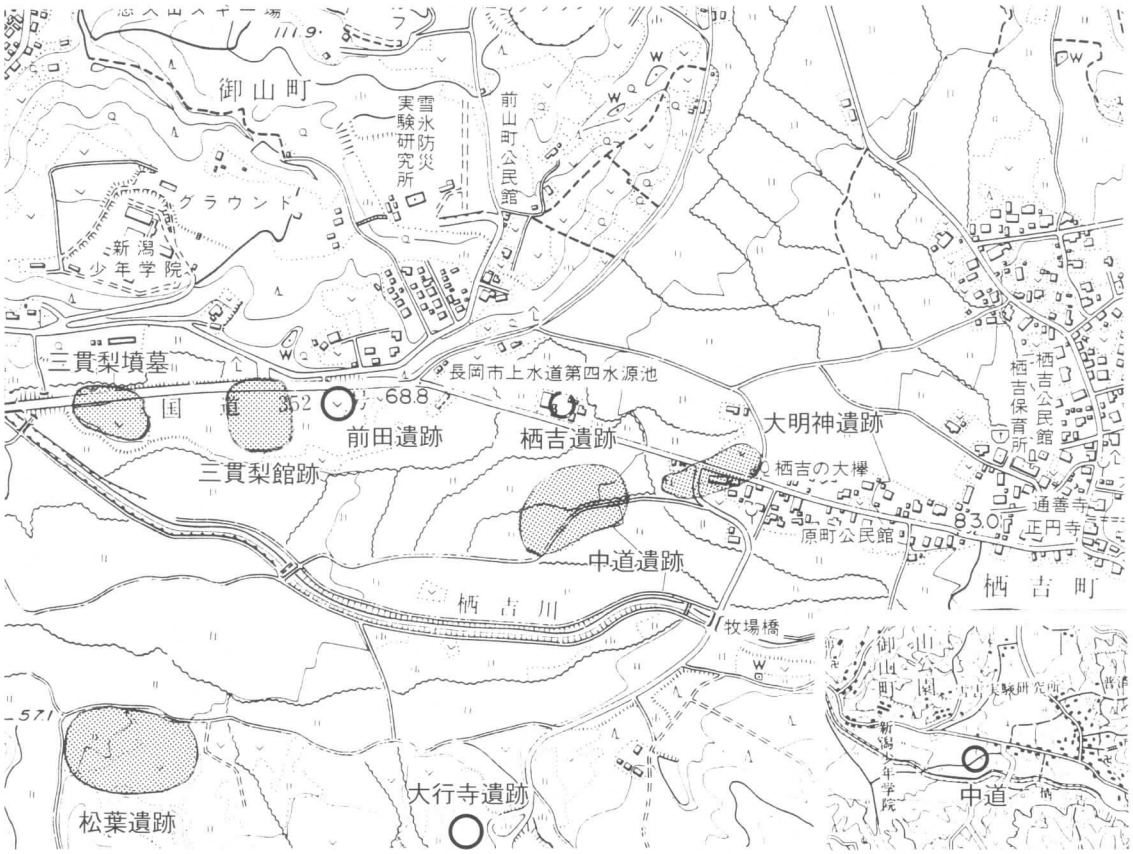
長岡市教育委員会

中道遺跡の環境と発掘調査の経過

立　地（第１図）　長岡市を東西に分けて信濃川が北へ流れている。中道遺跡がある栖吉川は、信濃川右岸で、通称「東山」の山麓に位置している。栖吉町は東山からの谷口扇状地が広がり、特に東山と悠久山との間は一面の扇状地となっている。中道遺跡も大きくは栖吉川右岸の扇状地に立地するが、遺跡は北に沢が入り、南が栖吉川へ緩く傾斜して、あたかも舌状台地のように周囲より一段高くなっている。標高は約67.5～70m、現状は水田である。

栖吉の歴史（第１図）　栖吉町には栖吉城をはじめ、前田遺跡、大明神遺跡、栖吉遺跡（以上、縄文時代）、松葉遺跡（縄文・中世）、大行寺遺跡、三貫梨墳墓、三貫梨館跡（以上、中世）、それに今回発掘調査を行った中道遺跡などがある。松葉遺跡は縄文時代早期後半の土器が出土し、今のところ市内の東山沿いでは最も古い。その後、前期の後半には三貫梨墳墓で、中期には松葉や中道で、後期は中道、晩期には松葉・大明神・中道に集落を営んでいる。弥生時代には悠久山の尾根上に高地性集落の堅正寺遺跡がある。そして、中世には東山の丘陵上にある栖吉城を中心に、各種の遺跡が展開している。

調査に至るまで　中道遺跡の発掘調査は団体営土地改良総合圃場整備事業栖吉南部地区（事業主体：長岡市農業協同組合）の計画に伴って実施したものである。調査は事業主体者と協議のうえ、面積などの事情から平成６年度から３カ年で発掘を、発掘後の平成９年度に報告書を刊行する予定で行うことにした。中道遺跡の推定面積は約15,000㎡、第１次発掘調査はそのうちの3,700㎡を対象に行った。そして、報告書刊行前に各年次ごとの調査概要を報告することとし、本書はその第１次調査分である。なお、圃場整備事業計画地の遺跡確認調査は平成３年・４年度に行った。



第１図　中道遺跡の位置（1/10000、1/50000）

発掘調査　中道遺跡の第１次発掘調査は、平成６年６月６日に水田耕作土をバックフォーで除去する作業から始まり、10月下旬までの約５カ月間行った。その後は、市役所幸町分室で出土品などの整理作業を行った。

大まかな調査の手順は、①地山面までの遺物包含層を発掘、②地山面で黒色になっている竪穴住居跡などの遺構検出、③遺構の発掘、④遺構の写真撮影、⑤遺構の測量である。ヒスイの大珠や石棒・土偶などが出土した場合は、その状況を図面や写真で記録する。また、遺構の測量は基本的には測量業者の平板測量によるが、土層断面や次の発掘作業で削り取られる遺構の平面はそのつど調査員と作業員で測量するようにした。遺跡全体における遺構の配置状況は図面のほか、空中からの写真とで把握するようにした。

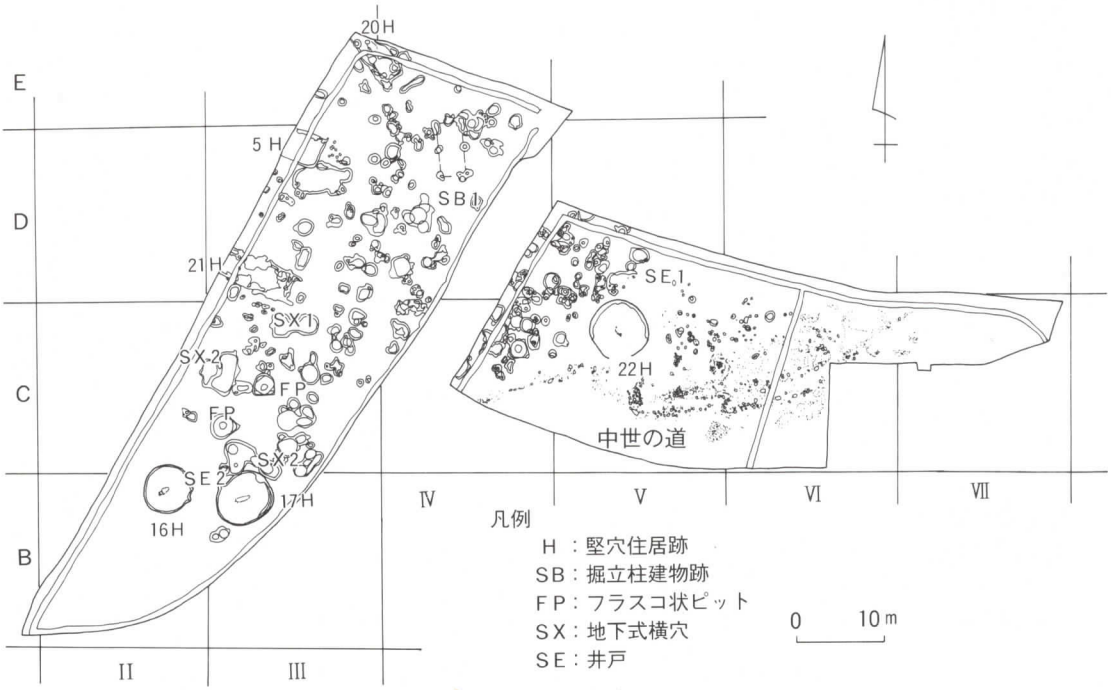
なお、調査は遺跡全体を大（20×20m）・小（２×２m）のグリットに区画して発掘を進めた。グリットは磁北に合わせて設定した。

包含層の発掘

柱穴の発掘

フラスコ状ピット内の石棒出土状況

遺構の測量



第２図　第１次発掘調査の遺構全体図（1/1000）

縄文時代の遺構・遺物

第１次発掘調査で発見された縄文時代の主な施設の痕跡（遺構）は、竪穴住居が黒色土中の炉跡を含めて22軒、掘立柱建物跡１棟、貯蔵用のフラスコ状ピット28基、墓と思われるピット（土壙墓）８基などがある（第２図）。

第16号住居跡検出状況

第16号住居跡発掘スナップ

第16号住居跡土器出土状況

第16号住居跡（第３図）　これまで長岡市内で発見された竪穴住居跡は直径３～５ｍの円形、もしくは一辺３～５ｍの方形に地面を掘り下げて土間床と壁を作る。そして、内部に暖房や調理用の炉、柱を立てる柱穴、湿気を防ぐためか壁際に巡らした狭い溝（周溝）が通常の施設としてある。

第16号住居跡は縄文時代中期中葉の竪穴住居跡で、遺跡の南西の端近くに第17号住居跡と並ぶように位置していた（第２図）。直径約5.6ｍの円形で、確認面からの深さ約40㎝ほどの竪穴住居跡である。第16号住居跡の施設は通常のほかに、住居の壁際に幅約40～60㎝、高さ約15㎝ほどのベット状施設がある。ベット状施設はこの時期の円形竪穴住居跡によく見られるものである。炉は石を長方形に囲い、炉縁の石に飾られた土器の把手部分がおかれていた。第１号住居跡も同じで、第１号はさらに飾られた土器の把手がおかれた炉の反対側の床面に、頭部と両腕を欠損した土偶（第４図２）が横たわっていた。土器の把手で囲炉裏を飾る現象は、信濃川左岸の岩野原遺跡には見られず、中道遺跡の特徴である。

竪穴住居はある事情で廃棄されて屋根や木柱が腐ってなくなると、大きな窪地となる。その窪地に周囲の黒色土が流れ込んで住居跡が埋まるとともに、その過程で窪地は壊れた土器や不用になった石器などのゴミを投げ捨てるゴミ捨て場として再利用されることがある。第16号住居跡は住居跡の窪地をゴミ捨て場として再利用されており、打製石斧や凹石などの石器と、多量の土器が出土している。

第16号住居跡

第17号住居跡

第16号住居跡出土の土器（第４図10～13）は、胴部に渦巻文が貼付されたり（11・12）、横方向の沈線間や渦巻文の間を綾杉状の沈線で埋めており（10）、中期中葉の大木８ｂ式期から後葉の大木９式期にかけての土器と考えられる。

ヒスイの大珠

第17号住居跡　第17号住居跡は短軸5.6m、長軸6.4mの若干楕円形をしている竪穴住居で、住居内の施設は第16号住居跡とほぼ同じであるが、炉縁は土器の把手で飾られていない。ただし、火種を入れる炉中央の埋甕に飾られた土器（第５図４）が使われていた点が違う。第15号住居跡でも飾られた土器（第４図16）が埋甕であった。土器の把手で炉を飾ったり、飾った土器を埋甕に利用することは、火に対する精神的なものが感じられる。

土偶・人面把手（右上）・石棒

第17号住居跡からは、大量の土器のほかに石鏃・打製石斧・凹石・石皿などの遺物が投げ捨てられた状態で出土した。中には頭と右腕を欠損した土偶（第４図１）が土器に混じっていた。この土偶の頭は第17号住居跡から南へ約15m離れた包含層から出土した。おそらく、ケガレを背負わせてた土偶を捨てる際に、頭と胴がバラバラになったものであろう。

第17号住居跡の土器

第４図４～９は第17号住居跡出土の土器で、４・５・７は綾杉状沈線が見られ、第16号住居跡出土土器に近い様相をもっている。だが、６・８・９は縄文地文の上に沈線で渦巻文を描き、８は渦巻きをモチーフにした立体的な装飾の把手があり、同じ大木８ｂ式土器の中でも第16号住居跡出土の土器より古い様相が見られる。第15号住居跡の埋甕（第４図16）も大木８ｂ式の土器である。

中道遺跡には円形の竪穴住居跡のほかに、長方形の竪穴住居跡もある。第５号や第20号住居跡などがそれで、第20号住居跡は床面に置かれた土器（第４図

根固めをした柱穴

根固めをした柱穴

第１号建物跡

17）から第16号・第17号住居跡より新しい大木９式期の住居跡と判断される。なお、長方形の竪穴住居跡は、いずれも第１次発掘調査区の西端部に半分発見されており、第２次発掘調査で残りの部分を発掘して全体をつかむ予定である。

第１号建物跡　竪穴住居の柱穴とは比較にならないほど太くて深い穴に柱を立て、立てた柱を石や掘った土を突き固めて頑強に根固めをしたものを掘立柱と言い、この掘立柱で構成している建物を掘立柱建物と言う。掘立柱建物は掘立柱で囲まれた中に囲炉裏がないことや、富山県桜町遺跡で高床の柱が出土した例があるなど、これまでの研究から高床の建物であると考えられている。第１号建物跡は石で根固めをした６本の掘立柱を長方形に配置（桁行２間、梁間１間）した建物である。時期は柱穴出土の土器から中期の終わりごろから後期の初めごろと、考えられる。第１号建物跡以外に、第１次発掘調査では建物跡を推定できなかったが、石や土で根固めをした掘立柱穴が10本以上発見されている。

磨製石斧（左４点）・打製石斧

第22号住居跡　縄文時代晩期中ごろの竪穴住居跡で、直径約6.8mと中期の第16号・第17号住居跡と比べて大きい。炉石を円形に囲い、柱穴は一辺約２mの方形に４本、その外側に支えの小さい穴がやはり４本並んでいた。この第22号住居跡の大きな特色は、床面に火災の痕跡が見られ、壁に焼けた板材が残っていたことである。壁板が焼け残っていたことは、竪穴住居の構造を知るうえで貴重な資料である。また、最近住居の外側に土を盛り上げた周堤帯の存在が知られるようになった。周堤帯は雨水が住居内へ流れ込むのを防ぐ施設と考えられている。第22号の壁板は、周堤帯を内側から押さえる板との見方もあり、その点からも注目されている。

石鏃・石錐（右２列）・石匙（右端）

第22号住居跡からは、石鏃・磨製石斧・凹石・石皿・磨石などの石器と、多数の土器が出土した。第４図22～24は第22号住居跡出土の土器で、口縁や頚部に数本の沈線が巡り、口縁は小波状口縁（22・23）となる大洞Ｃ１式の土器である。

第22号住居跡

第22号住居跡の発掘

第22号住居跡の壁板（Ｃブロック）

中世の主な遺構・遺物

栖吉は、中世において古志長尾氏が拠点とした栖吉城跡を中心に栄えたところである。中道遺跡でも中世の遺構や遺物が発見されている。確実な中世の遺構としては井戸跡が２カ所ある。いずれも深さ約２ｍ、円形の素掘り井戸である。井戸からは曲物や木皿などの木製品が出土した。その他、中世の遺物は伴っていないが、一辺２～３ｍの方形の穴を２基、細い通路で連結させた遺構が３カ所ある。天井部は崩落しているが、中世の柏崎市岩野遺跡の「地下式壙」や関東地方の「地下式横穴」と同じ形態である。また、遺跡の南側に幅約１ｍ、延長約60ｍにわたって小石から拳大の石が並んでいた。珠洲焼が周辺から出土していることなどから、中世の道路の縁石若しくは屋敷の区画と思われる。これら以外に中世の遺構としては、柱及び柱穴が数本検出している。

中世の遺物としては、珠洲焼の甕や摺鉢、青磁・天目・染付・瀬戸などの茶碗や皿の類、灯明皿として使用した「かわらけ（土師質の土器皿）」、暖房器具として使った瓦質土器などの陶磁器類と、皿、櫛、木の小槌、曲物の底板、箸などの木製品が、包含層や井戸跡から出土している。木製の皿は内外面に黒漆が塗られ、そのうちの１枚には、内面に朱漆で「田」の字が描かれていた。15世紀の遺物である。

第１号井戸

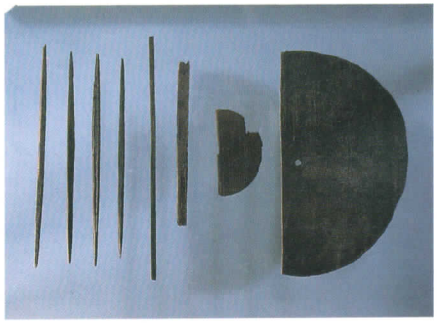
第１号地下式横穴

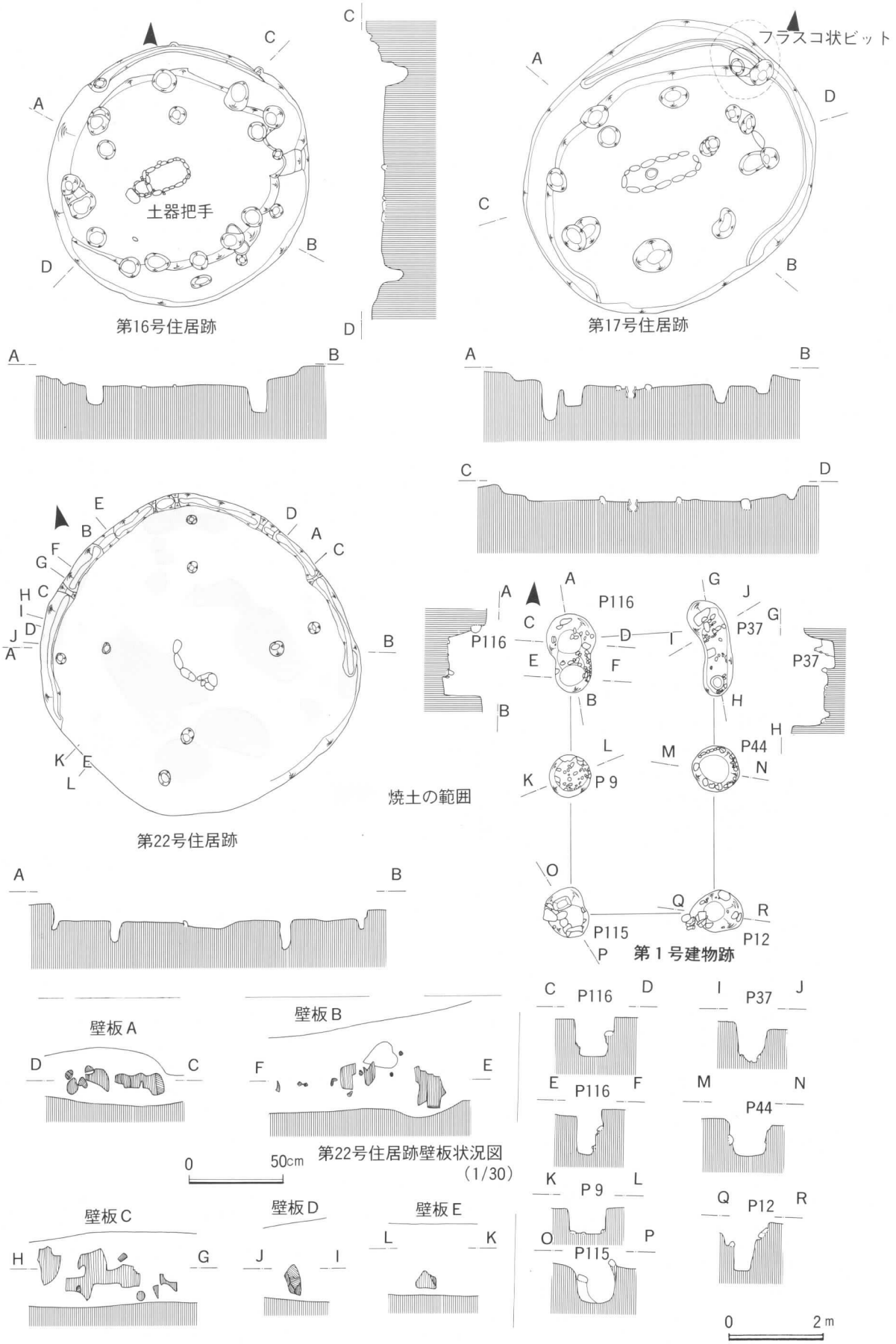
中世の道？

珠洲焼の甕・摺鉢

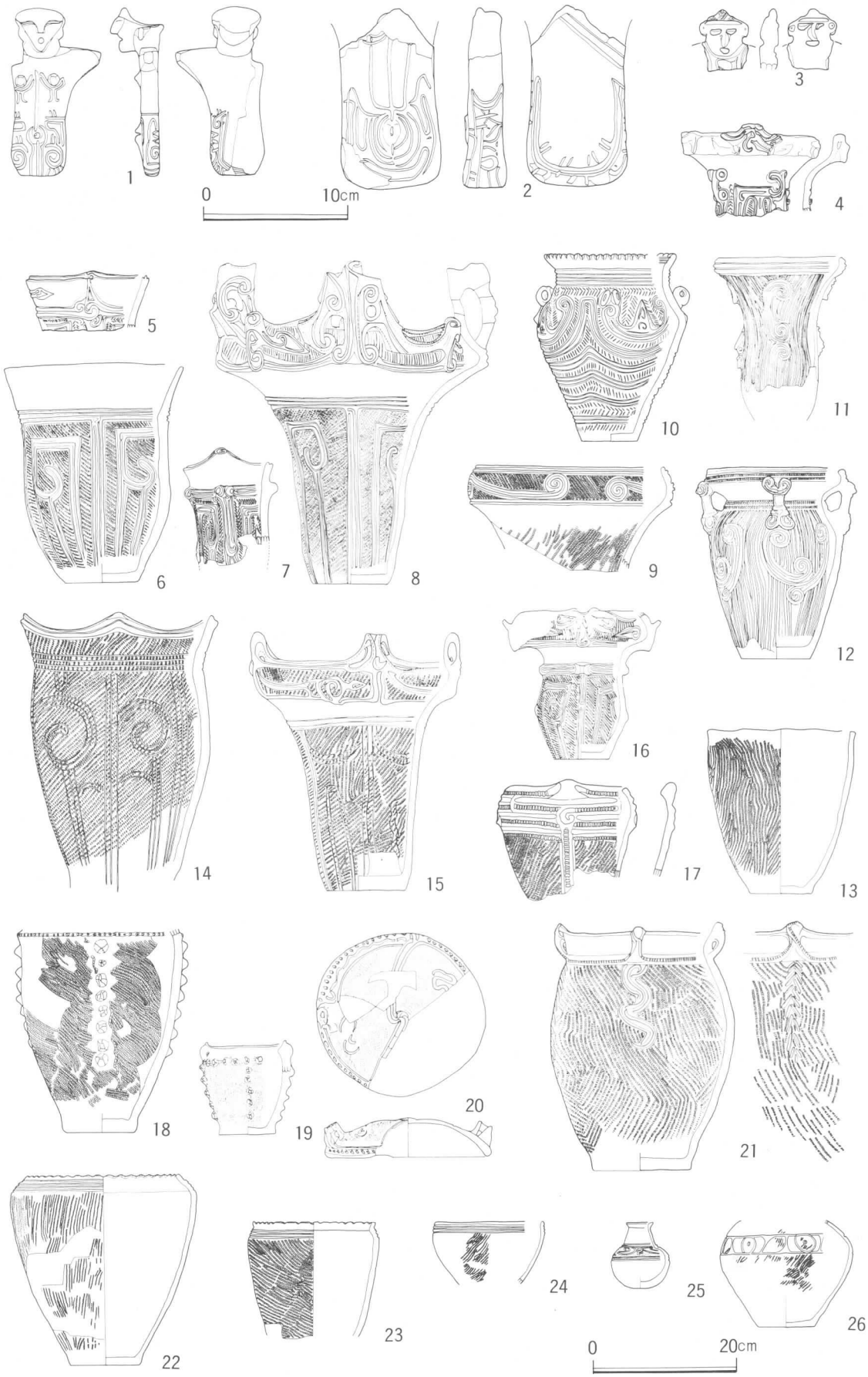
皿、櫛、木の小槌など

青磁・天目・染付


曲物の底板・箸など



第3図　縄文時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡実測図（1/120）



第４図　縄文時代の土偶（1/4）・土器（1/8）実測図

報告書抄録

ふりがな	なかみちいせき
書名	中道遺跡
副書名	第1次発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗
調査機関	長岡市教育委員会
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	新潟県長岡市幸町2丁目1番1号
発行年月日	西暦1995年3月30日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
中道遺跡（なかみちいせき）	新潟県長岡市（にいがたけんながおかし）栖吉町字中道（すよしまちあざなかみち）	15202	5	37°25′10″	138°53′32″	19940606～1024	3700	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
中道遺跡	集落跡	縄文時代中期～晩期	竪穴住居跡 22 掘立柱建物跡 1 フラスコ状ピット 28 土壙墓 8	縄文土器コンテナ（横53.5、縦34.5、深さ15㎝）250箱 石鏃40、石槍1、石匙3、石錘45 石皿80、凹石180、磨製石斧80 打製石斧70、土製耳飾り5 ヒスイ大珠2、石棒11、土偶3	
		中世	井戸2、道路1 地下式横穴3	珠洲焼90、青磁等の陶磁器類60、かわらけ16、櫛1、木皿3、木の小槌1、曲物5、箸20	

中道遺跡　－第1次発掘調査概報－

平成7年3月28日印刷　平成7年3月30日発行

発行：長岡市教育委員会　印刷：㈱第一印刷所